

日本民家園だより

第57号

平成17年1月5日

編集・発行 川崎市立日本民家園



特集・企画展示
こかげさん
蚕影山

養蚕信仰の世界

17年1月5日(水)～5月29日(日)開催

山下家2階展示室

日本民家園収蔵品目録3「船頭小屋・蚕影山祠堂」刊行

【関連行事】

民俗映像記録上映会「川崎の養蚕と信仰」2月12日(土)

14:00-14:30 申込不要(当日直接おいで下さい) 原家2階

川崎最後の養蚕農家(麻生区黒川)の作業過程と市内の養蚕信仰の様子を記録したもの。

民俗芸能公演「蚕影山和讃」3月19日(土) 黒川蚕影山和讃保存会

1回目13:30-14:00

2回目14:30-15:00 申込不要(当日直接おいで下さい) 作田家

麻生区黒川では、毎年2月初午の日に、養蚕の神を祀る講中の女性たちが「蚕日待」を行って来ましたが、「蚕影山和讃」はこの席で唄われたもので、蚕影山の由来のほか、蚕の飼育方法を説明するものとなっています。今回の公演では保存会の方々を招き、江戸時代から続く貴重な唄声をご紹介します。



木造馬鳴大菩薩像



蚕影山本地牛王印版木

〔はじめに〕

蚕影山^{しどろ}祠堂^{わかがみ どうこういん}は、昭和45年に現在の川崎市麻生区岡上の東光院境内より移築されました。養蚕の神を祀ったもので、文久3年（1863）建築の^{くうでん}宮殿と、元治2年（1865・推定）建築の^{さやどう}覆堂からなります。養蚕信仰の姿を伝える貴重な建築物として、平成7年に川崎市重要歴史記念物に指定されました。

この移築とともに、関連資料も収集されました。祠堂に祀られていた馬鳴大菩薩像、蚕影山大権現像のほか、授与されていた護符の版木や祭礼時の^{のほり}幟、養蚕講中で祀っていた^{こんじさひめ}金色姫の御影など、いずれも特徴あるものです。

ここではこれまで行なわれた聞き取り調査をもとに、この祠堂で行われた祭や行事についてご紹介します。



蚕影山祠堂彫刻

〔金色姫〕

祠堂の宮殿側面には、養蚕を日本にもたらしたという金色姫の木彫が施されています。これには、つぎのような話が伝えられています。

天竺^{てんじく}の王女金色姫は、継母^{まはは}に憎まれ、四つの苦難を受けました。はじめは獅子^{しし}の谷に捨てられました。しかし、獅子に背負われて王宮に戻ります。つぎは鷹^{たか}の山に捨てられました。しかしこのときは、鷹狩^{たか}にきた大王の兵士に助けられます。さらには小島に流されました。しかし今度は、釣り人に助けられます。最後は王宮の庭に生き埋めにされました。しかし、占いによって大王が知り、掘り出されます。このあと王は、この国で苦しめられるよりはと、桑の木^{ひたらのくに}のくり舟に乗せて姫を流しました。姫は常陸^{ひたらのくに}国の豊浦^{じょうらみん}湊に流れ着き、夫婦に助けられて育ちますが、まもなく亡くなってしまいます。夫婦は嘆き悲しみました。するとある夜、夢に姫が現れます。そのお告げに従い亡骸を納めた棺を開けると、中に小さな虫が入っており、姫の乗ってきた舟が桑^{くわ}だったのでこの虫に桑を与えますと、やがて繭^{まゆ}を作りました。これが、養蚕のはじまりだということです。

祠堂の彫刻に描かれているのは、金色姫のこの四つの苦難です。蚕は4度脱皮をくりかえし、その直前には「眠」と呼ばれる餌をとらない期間があります。金色姫の4つの苦難とはこの4回の休眠を象徴するもので、このあと姫が乗せられる桑のくり舟は繭を象徴しています。

〔祭礼〕

蚕影山祠堂の祭は3月23日（旧暦2月23日）でした。日本民家園では毎年、この祭を再現する展示を行なっていますが、実際の様子はつぎの



〔蚕影山本地略縁記〕

ようなものでした。

まず、23日の朝、当番2人がお堂に幟を立て、竿にトウロウを取付けます。また、正月に張った注連縄を新しいものに張りかえます。養蚕講中の人びとは、各家から団子を持ってきて供えます。団子の色は白と赤、形は丸いものと繭をかたどったものがありました。これを葉のついたカシの木の枝にさし、お堂の中に飾るのです。また、5個から7個の繭を糸でしばり、こちらはお堂の格子戸に吊しました。

この祭には芝居が立ったこともありました。祠堂のそばにムシロがけの小屋が建ち、旅芸人が夕方から夜の10時ぐらいまで上演したといえます。このときは岡上だけでなく近在からも見物人が集まり、露店なども出てにぎわったそうです。

[蚕影山詣り]

祠堂の前に置かれた元治2年銘の手洗石に、「女人講中」の文字が残されています。しかし、この講がどのようなものであったのか、はつき

りしたことはわかっていません。ただ戦前まで、蚕影山詣りという女性たちの行事は残っていました。この行事は、4月の養蚕が忙しくなる前の一日、農家の女性が行楽をかねて寺や神社を参拝して歩くものです。女性たちは「蚕影山詣り」と記された襷をかけ、道々お念仏を唱えながら歩いたそうです。お参りに行く先は、秦野の白笹稻荷、藤沢片瀬の竜口寺や江ノ島弁天などで、鉄道を使っての日帰りの行事でした。もらってきたお札は蚕室に貼ったそうです。

[出開帳]

蚕影山祠堂では出開帳も行なわれていました。輿に本尊馬鳴大菩薩を遷座させ、講中の人が付き従って、養蚕農家をめぐり歩いたのです。岡上だけではなく、周辺地域までまわっていたといえます。ただし、この行事は明治のころに終わってしまったようで、現在は記憶している人もいません。

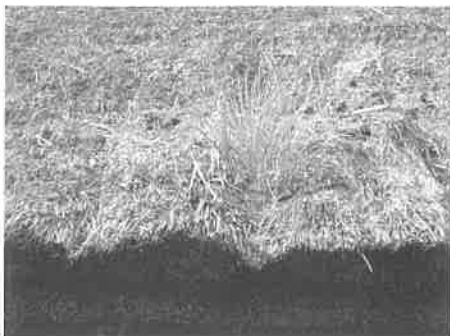
(学芸員 澁谷卓男)

民家園ウォッチング⑥

古民家屋根葺替え工事



軒先部の茅が落下(旧野原家住宅)



腐朽が進み草本類が発生(旧山田家住宅)

昨年は台風と大雨が多く、古民家も大分被害を受けました。旧野原家の背面の一部は軒先部の茅が落ち、ビニールシートで被ったり、旧山田家背面では雨漏りがし、合掌造りの外に突き出た水梁(カンザシ)を鉄板で巻く等の応急処置を施し、大変見苦しい姿をお見せすることになりました。ただ、台風や大雨にかかわらず、たとえば山田家は葺替えの時期となっています。山田家の屋根の背面、正面ともよくみると、所々に屋根に草が生え、茅を押さえるホコダケ(ヌイボク)が露出し、降雨による溝ができています。草が生えているのは既にその部分が腐っているからです。これらは、茅が消耗し(痩せ)、「早く屋根葺替えをしてください」との屋根の悲鳴です。このまま放置すると、溝がさらに深くなり、雨漏りがし、内部の軸組を腐朽させることとなります。山田家住宅は、台風と大雨により、茅の消耗(屋根の腐朽)が加速されました。

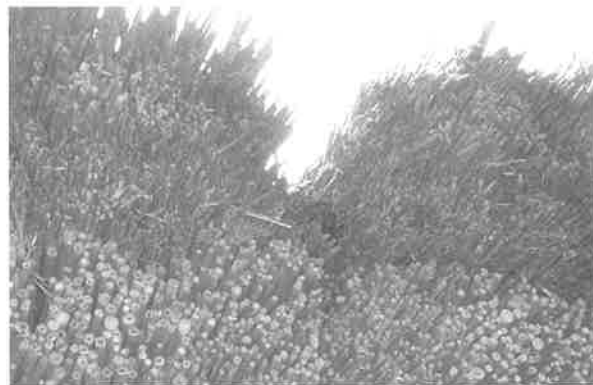
ただし、決して「木の家はもたない」ということではありません。引っ張りに対する強さでは木材は鉄より強いし、構造材料としての木材の寿命(耐用年数)は、腐朽や火災に会わずに適宜メンテナンスを欠かさなければ、その耐久性において鉄やコンクリート等他の追従を許しません。(次頁へ)



雨漏りにより内部にキノコ発生（旧山田家住宅）



ホコダケ露出（旧山田家住宅）



雨水侵食で溝ができ、茅下地のオガラまで達している（旧山田家住宅）

（前頁から続く）民家園の古民家の中には建てられてから300年以上経ったものが何軒もありますし、法隆寺は1300年の長さを誇っています。従って、木造建築を維持するのは適宜なメンテナンスなのです。

かつては、茅葺き民家の屋根葺替えは、1軒1軒の民家で行うものでなく、「結い」や「屋根講」といった無償の労働力により、集落が共同で行って来ました。屋根材も集落や個人で維持管理された茅場から調達して来ました。しかし、現代においては、屋根葺替えは基本的には所有者個人の力でせざるを得ません。労働力も、茅も購入しなければなりません。文化財である古民家を維持し、次世代に継承するためには多大な経費を要することになります。

平成16年度の日本民家園古民家維持管理関係予算は県補助金を含め2750万円です。平成12年度作田家と北村家差茅は2175万円、平成13年度の伊藤家葺替えは2520万円でした。家の大きさによりますが、合掌造り民家では葺替えに4～5,000万円かかります。40年近い歴史をもつ民家園は、各民家の葺替えを含む修理についての実績データがあり、それにもとづく修理予定表がありますが、最近の財政事情もあって、なかなか予定通りに修理を進められないのが実情です。古民家の多くが修理を待っており、1年に1軒程度の修理では間に合わなくなっています。現在の予算では板葺である旧三澤家は来年までの4年が、山田家は最低でも3年かかります。このため野原家や山田家のように時に見苦しい姿をお見せすることになります。腐朽や火災に対する最善の注意を怠らず、適宜なメンテナンスをかかさなければ、文化財としての価値を損なうことはありません。皆様のご理解とご協力をお願いしたいところです。

今冬の屋根葺き替えは？

この冬の葺き替えは次の3棟で、周囲から見学できます。

1. 山田家（合掌造り） 茅葺き屋根（片面）葺き替え
2. 野原家（合掌造り） 茅葺き屋根（一部）葺き替え
3. 三澤家（宿場） 板葺き屋根補修

期間：平成17年2月初め～3月上旬